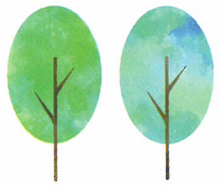
# いまを見つめて

第1回

**太田 愛**

おおた　あい／香川県生まれ。1997年テレビシリーズ「ウルトラマンティガ」で脚本家デビュー。「TRICK2」「相棒」などの脚本を手がける。2012年『犯罪者クリミナル』（上・下）で小説家デビュー。13年に『幻夏』を発表、17年には3作目の小説『天上の葦』（上・下）を刊行。



## 戦争と報道

### 危険な方向に向かう準備がされている

ここ5年間で特定秘密保護法、安全保障関連法、共謀罪…と立て続けに成立し、危険な方向に向かう準備が着々とされているような不安を感じています。なぜ今なのか―。戦後70年余り経って、戦前・戦中・戦後というひとつの流れを、自分の体験として記憶している世代がもうほとんどいなくなってきています。そのことが「なぜ今なのか」ということと無関係ではないのでは、と思います。

２０１７年に上梓した小説『天上の葦』では、現代で起こっている事件を通して、今の社会と戦争に突き進んでいった時代に共通するひとつの危険性について〝権力と報道〟と〝国家と個人〟のふたつを縦軸にして描きました。執筆に先立って、戦時中の新聞を精査することと、当時を知る90代の方々の取材を行いました。90代の方々に、いつから世の中の空気が変わったのかとお聞きすると、どの方も迷わず「満州事変」だとお答えになることが印象的でした。



### 戦争が報道に膨大な利益をもたらした

南満州鉄道を関東軍が爆破したという、自作自演の事実を、当時の政治家と新聞界のある程度の人たちは感知していましたが、結局報道は自国軍の謀略を暴露することができずに軍の発表のまま垂れ流してしまいました。

当初、軍縮の論調をとっていた新聞は、軍の圧力、右翼による脅し、在郷軍人の不買運動などにより、瞬く間に軍部に屈しました。それ以降は一緒に手をとって戦争を進めていく立場になっていきます。この路線変更が大手の新聞社にとって膨大な利益をもたらすことになります。戦況を知りたい、出征している身内の安否を知りたいと購買者数が飛躍的に伸び、戦線が拡大していくのにしたがって販路が拡大していく。戦意高揚のために戦争記念博覧会のようなものを主催したり、戦時歌謡の歌詞を募集するなど、路線変更した新聞にとって戦争は儲かるイベントである側面がとても強かったと思います。

また、新聞社は紙面を使って、一口一円で軍に軍用機を献納するために献金しましょうと呼びかけました。一円は当時ビールジョッキ4杯分ほどで、それほど高いわけではない。90代の方々に聞くと、当然報道を信じて、中国がふっかけてきた戦でこれは兵隊さんを応援しないといけない、と大勢の人が献金を持って新聞社に駆けつけたそうです。さらに新聞社は、大口の献金者の名前や企業名と金額を紙面で発表して称賛したり、幼い子どもがお菓子とおやつを我慢して貯めたお金ですとおばあさんと一緒に持ってきたことを美談として掲載したりしました。その結果、1ヵ月で60機もの軍用機を軍に献納したのです。

これは結局、南満州鉄道を中国軍が爆破したという、虚偽の報道からはじまったのです。この軍と報道と国が一体となって、国民をだましこんだ嘘は、敗戦後までわかりませんでした。取材した方々は報道を信じ、戦争へと動いた時代の空気をはっきり覚えていました。

取材を始めたのは２０１４年春。その前年の12月に特定秘密保護法が可決成立し、これは90代の方々に、そのときのことを絶対に聞いておかないといけないという大きな動機のひとつになりました。

『天上の葦』　上・下
KADOKAWA

渋谷のスクランブル交差点で起こった老人の不審死と、ひとりの公安警察官の失踪を刑事・相馬、興信所の鑓水、修司の３人が追う。２つの事件がひとつに結ばれた先にあったものとは―。感動のサスペンス巨編。